

小特集「子どもの音声」にあたって*

荒井隆行 (上智大学)**

43.10.Ln

1. はじめに

私ごとで大変恐縮だが、本小特集の企画を最初に提案した頃、我が子がちょうど10か月であった。双子の男女を授かり、育児に携わるようになってからというもの、人間が持つコミュニケーションに対する「能力の不思議」を日々目の当たりにしている。編集作業を1年にわたり行い、今、この原稿を書いている時点ではすでに19か月にまで成長した。その間にたくさんの言葉を覚え、現時点でざっと数えただけでもいつの間にか百数十のことば（擬声語や擬態語なども含む）を話せるようになっている。子どもの成長の速さには目を見張るものがあると同時に、そこに、ある種神秘的なものすら感じてしまうのは私だけではないであろう。

このような背景のもと、自分自身の専門が音声分野であることも相まって、もっと子どもの音声について知りたいと思うようになった。しかし、過去の本学会誌上における記事を振り返っても、まとまったものがなかったことから、多くの会員にとっても有益なものになるであろうと確信しつつ、本小特集号を企画することとなった。

2. 本小特集について

本小特集では「子どもの音声」について、五つの視点から論じていただいた。

「子どもの声道発達と音声の特性変化」では、解剖学的側面から子どもの声道の発達を論じた後、声道発達によって音声の特性がどのように変化するかを中心に解説していただいた[1]。「乳児は生後5か月の時点で聴取した母音を真似て発声することができる」[1]とのことだが、我が子の母音を

観察していて、正にそのことを実感していた。8か月の時点で双子の音声を録音して分析してみた結果、その中にはすでに日本語の5母音としてははっきり認識されるような「母音」の音が収録されていた。更にスペクトル分析をすると、フォルマントがはっきりと観測された(図-1)。この記事[1]を読むと、子どもの声道の成長は一定ではないことがよく分かる。その一定ではない成長の中で音声や言語を獲得していることを考えると、その過程がより複雑に関連していることに驚く。

「乳児の音声発達」では、生まれてから1年ほどの乳児期に言語音の体系を学んでいく過程を中心に解説していただいた[2]。特に、日本人乳児を対象とした最近の研究成果は大変興味深い。我が子を観察していても、自らが話せないだけで、こちらが思っている以上に通じている(理解している)ことが多いことに驚かされる。言葉を話す頃には音の体系ができていくというデータには、実感を伴って改めて納得させられるものがある。この記事の最後にある「乳児が母語の言語音声を効率的に処理できるということがその後の言語獲得をより効率的に行うのに役立っているということを示している」[2]という点にも、「なるほど」と合点がいった。

「子どもの構音障害」では、構音障害の定義や分類、音の誤りの例やその評価、治療に至るまでを解説していただいた[3]。我が子の場合、19か月になっていろいろなことばを話す一方で、いわゆる音が「置換」されていたり、「歪んでいる」例も観察される。それは例えば、「りんご」や「おんり」という語の「り」が「ぎ」や「でい」のようになる、あるいは「きれい」のラ行音がいわゆる「側音化構音」[3]になっているケースである。しかし、それはすぐに構音障害というわけではなく、その多くは発達と共に正しい音に変化するだろうことが、この記事[3]からもよく理解できる。

* Foreword to the special issue on children's speech.

** Takayuki Arai (Sophia University, Tokyo, 102-8554)
e-mail: arai@sophia.ac.jp

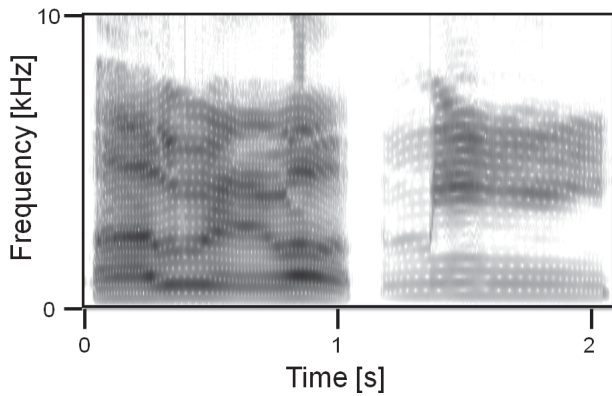


図-1 二人の乳児による発話に対するサウンドスペクトログラム

左：/aueo/ (男児, 8 か月), 右：/mi:/ (女児, 8 か月)

「音韻理論の枠組みで言語データを分析するということ」では、音韻獲得データを対象として最適性理論による分析を取り上げていただいた[4]。その中には摩擦音が閉鎖音になる発達遅滞児の話が出てくる。/s/の音は出すのが難しい、ということは我が子を観察していてもよく分かる。最近、「だいすきー」といって相手に抱きつくことを覚えた。その音声は「だいきー」とも聞こえる。この場合、摩擦音が閉鎖音の促音になっているようである。これは最適性理論でいうところの「摩擦音禁止という有標性制約が忠実性制約よりの上」[4]ということになるのだろう。更に上記の発達遅延児の話で興味深いのは、摩擦音が閉鎖音になるのに加えて更に流音が渡り音になってしまう場合、摩擦音だけ訓練すると摩擦音は改善され流音は改善されないのに、一方で流音だけ訓練したケースでは、それにもかかわらず摩擦音も改善されたということ、そしてそれを最適性理論によって説明できるという点である。理論がいろいろな現象を説明する助けになっていることがとてもよく理解できる。

「幼児期・学童期の音韻意識の発達」では、子どもの特に読みの障害(発達性ディスレクシア)を通して、読みの発達と音韻発達の関わり、就学前から学童期の音韻発達を音韻意識について解説していただいた[5]。我が子はまだ字を読むには早すぎるが、日本語の音韻意識は次第と育ってきている

ように感じるものがしばしばある。例えば、たまたま英語で“back”と子どもに向かって言ったときがあった。そのとき、子どもは「ばっく」と繰り返したのだが、語末に母音が挿入されていた。別の例では、ボタンを留める動作を「ばっちん」と言いながらしていると、いつの間にかその「音」を真似するようになった。しかし、その音は「ばんちん」、あるいは「ばんちん」になっている。「ばっちん」には日本語の促音と撥音という二つの特殊拍が含まれるので獲得するのは難しいと思われるが、それらを4拍と意識しているからこそそのような間違いになったのだらうと、この解説[5]を読みながら感じた。

3. おわりに

このように、本小特集号では「子どもの音声」を多角的に見た。普段、何気なく接している子どもの音声であっても、その背景を知ることによって「人間の起源」に少しでも迫れる気がする。

なお、「子ども」と一言でいっても、以上のように年齢にも幅があり、その場に応じて専門的な議論をする場合には、乳児、幼児、学童など各執筆者によって最も適切な用語に使い分けていただいた。また、「調音」と「構音」というように同じ意味の用語であっても、記事によって執筆者にとって最適な用語を使っていただくようにした。

また、本小特集における記事の一部については、本学会英文誌である *Acoustical Science and Technology* Vol. 33 No. 3 と No. 4 にも関連する *Invited Review* が掲載される予定であるので、合わせてお読みいただきたい。

文 献

- [1] 麦谷綾子, 廣谷定男, “子どもの声道発達と音声の特性変化,” 音響学会誌, 68, 234-240 (2012).
- [2] 馬塚れい子, “乳児の音声発達,” 音響学会誌, 68, 241-247 (2012).
- [3] 浅野和海, “子どもの構音障害,” 音響学会誌, 68, 248-253 (2012).
- [4] 都田青子, “音韻理論の枠組みで言語データを分析するということ—最適性理論を使った音韻獲得データ分析—,” 音響学会誌, 68, 254-259 (2012).
- [5] 原 恵子, “幼児期・学童期の音韻意識の発達,” 音響学会誌, 68, 260-265 (2012).